

なくなった人もいる。その人は手術後、早く「彩」の仕事に戻りたい一心で短時間で退院し、静養もそこそこに仕事を始めた。それがリハビリになったのか、じきに一人で歩けるようになって医者も驚いたという。

突然の病で子供が亡くなり、家にひきこもって泣き暮らしていた人もいる。心配した近所の人が、ちょっとでも「彩」をしたら気がまぎれるからと励まし、葉っぱの作業をするうちに少しずつ立ち直ることができたという。

高齢者に「自分ができる仕事」という生きがいを持ってもらうことは、これからの高齢化社会に欠かせない大きなキーポイントだろう。

【横石 (2007) p.204】

老人医療費は一般的に高齢化率に正比例して高まるとされていますが、上勝町ではほとんどの高齢者が働いているおかげで、いまでは徳島県内 24 市町村中の 24 位。つまり、老人医療費がいちばん安く済んでいます。

2006 年度 (平成 18 年度) の一人当たりの老人医療費を調べると、徳島県内で最も高かった町は 93 万円で、もっとも安かった上勝町は約 63 万円。実に 30 万円も開きがありました。これを上勝町の高齢者人口 (1000 人規模) で考えると、3 億円も違う計算になります。ここに高齢者の医療費を抑えるカギがあります。(中略)さらに高齢者の有業率と医療費の相関関係をグラフ化した表 3 を見ると、有業率が高いほど一人当たりの医療費が低くなる傾向にあることが、より明らかになります。

上勝町の老人医療費が少ないのは、まさにこれです。高齢者が仕事を持って働くことは生きがいになり、生き生きと体を動かすことが病気の予防につながり、その結果が医療費の減少になって表れていると言えます。【横石

(2009) pp.42-44】

つまり、横石は「上勝町の一人当たり老人医療費が低水準にあるのは彩事業を中心として高齢者の高就業率に起因する」という仮説を展開している。

(横石の仮説の検証)

上述の表 3 に示されるように、彩参加者は非参加者と比して 75 歳以上では有意に抑うつ度が低く、また心配事は 50 歳以上でみても少ない。ただし、彩事業への参加者は 200 名弱で町民の約 1 割であるので、高齢者のすべてが彩事業に関わっているわけではない。

また、上勝町の高齢者就業率の推移に関するデータは国勢調査によるものが 5 年おきにあるのみで、上勝町役場によれば逐年データは存在しない<sup>1</sup>。

しかし、上勝町から提供された過去 23 年間の彩事業の売上高と上勝町の一人当たり老人医療費との相関係数は 0.626 と極めて高く、1% 水準で有意である (表 4)。また、両者の散布図には 2 次曲線が当てはまる ( $R^2 = 0.739$ ) (表 5)。これによれば彩事業の売上高が 1 億 5 千万円に達するが 1 億 5 千万円に達するまでは一人当たり老人医療費が上昇したが、売上高が 1 億 5 千万円を超えると 1 人当たり老人医療費が低減している (図 2)。彩の売上高と老人医療費はいずれも実質値ではなく名目値であり、この結果はたたき台の域を脱していない。

しかし、横石の仮説と矛盾しない結果と解釈することも可能であろう。

<sup>1</sup> 上勝町総務課長花本靖氏。

表4 上勝町における彩事業売上高と一人当たり老人医療費との相関係数

		一人当たり老人 医療費	彩売上高
一人当たり老人 医療費	Pearson の相関 係数	1	.626**
	有意確率 (両側)		.002
	N	22	22
彩売上高	Pearson の相関 係数	.626**	1
	有意確率 (両側)	.002	
	N	22	23

\*\* . 1% 水準で有意 (両側)

表5 上勝町における一人当たり老人医療費と彩事業売上高との関連の推計

モデルの要約とパラメータ推定値

従属変数:一人当たり老人医療費 独立変数: 彩

売上高

方程 式 (等 式)	モデルの要約						パラメータ推定値	
	R <sup>2</sup> 乗 (決定 数)	F	df1	df2	有意確率	定数	b1	b2
線型 (1 次)	.392	12.9 00	1	20	.002	598194.041	.71 8	
2次	.739	26.9 35	2	19	.000	502624.724	3.3 06	-1.062E-5

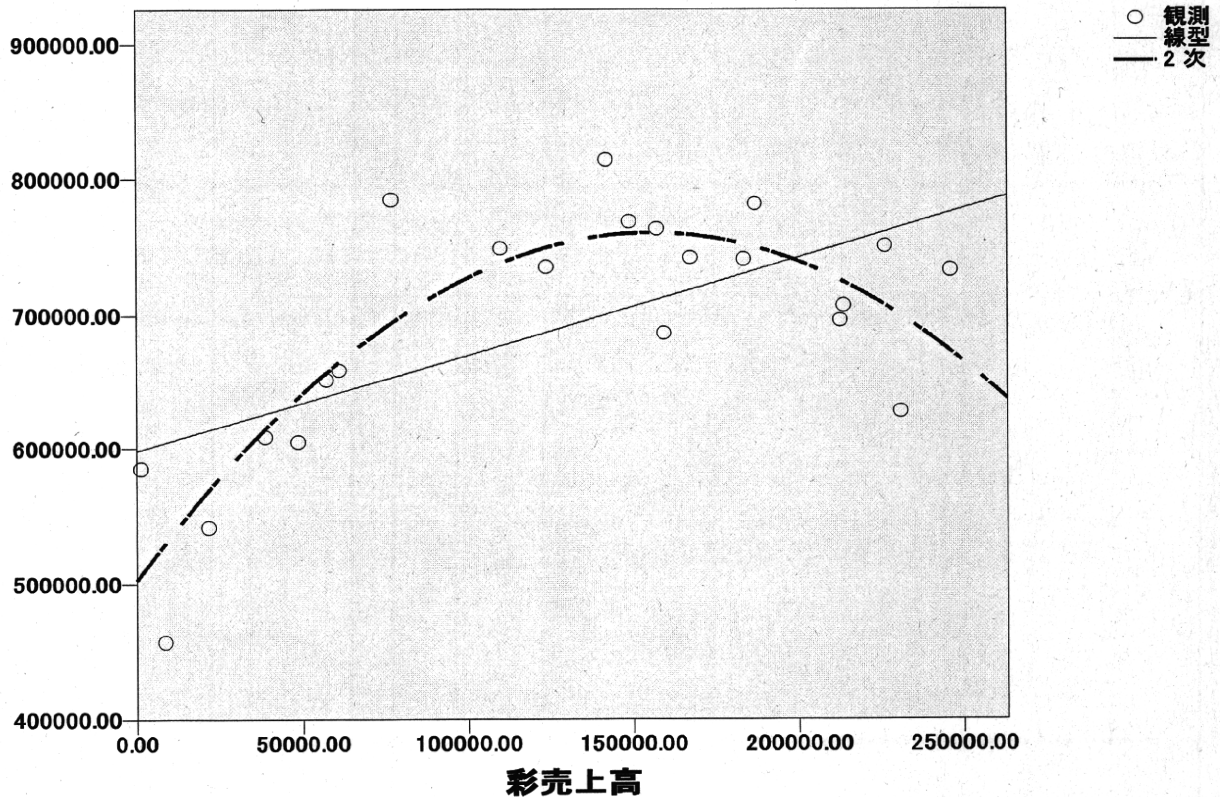


図2 上勝町彩事業売上高と一人当たり老人医療費

### E. 結論

- 1) 上勝町の社会関係資本は、2010年全国調査と比較して、一般的信頼が低水準であるが、特定化信頼と住民間のネットワークは極めてあつい。とくに、彩事業参加者はこの傾向が強い。
- 2) 生活満足度、主観的健康、抑うつ度との偏相関と、年齢を制御変数としてみると、一般的信頼とネットワーク（友人・知人・親戚・同僚との付き合い、団体参加）は、いずれも統計的に有意な相関がみられる。とくに、特定化信頼と主観的健康との間には大変強い相関がみられる。
- 3) 彩参加者は非参加者と比較して統計的に有意に抑うつ度（75歳以上）と

心配事（50歳以上）は少ない。ただし、抑うつ度については75歳以上についてのみ有意であり、サンプル数が限られているためより厳密な検証が必要である。

- 4) 上勝町の一人当たり老人医療費が県平均と比して低い理由は明確ではないが、彩事業の売上高と一人当たり老人医療費とのあいだには2次曲線が当てはまる。彩事業の売上高が一定水準に達するまでは一人当たり老人医療費は増加したがさらに売上高が増加すると医療費は減少に転じる。

## F. 引用文献

- 1) Fujisawa, Y., T. Hamano, and T. Takegawa (2009), Social capital and perceived health in Japan: An ecological and multilevel analysis, *Social Science and Medicine*, Vol.69, pp.501-505.
- 2) Ichida, Y., K. Kondo, H. Hirai, T. Hanibuchi, G. Yoshikawa, and C. Murata (2009), Social capital, income inequality and self-rated health in Chita Peninsula, Japan: A multilevel analysis of 25 communities, *Social Science and Medicine*,
- 3) 笠松和市・佐藤由美 (2008) 『持続可能なまちは小さく、美しい 上勝町の挑戦』学芸出版社.
- 4) 稲葉陽二・藤原佳典 (2010) 「少子高齢化時代におけるソーシャル・キャピタルの政策的意義—高齢者医療費の視点からの試論」『行動計量学』第37巻第1号, pp.39-52.
- 5) 上勝町 (2008) 『上勝町誌 続編』上勝町.
- 6) 小林珠美・田中寿恵・多田敏子 (2008) 「山間地域の高齢者の就業がQOLに影響を及ぼす要因について」『Quality of Life Journal』 Vol.9, No.1, pp.109-121.
- 7) 徳島県勝浦郡上勝町誌編纂委員会 (1979) 『上勝町誌』上勝町.
- 8) 横石知二 (2007) 『そうだ、葉っぱを売ろう！ 過疎の町、どん底からの再生』ソフトバンククリエイティブ.

- 9) 横石知二 (2009) 『生涯現役社会のつくり方』ソフトバンククリエイティブ.

## G. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

## H. 知的所有権の取得状況

なし

## 【研究協力者】

上勝町診療所長 鳥海進一氏、上勝町  
総務課長 花本靖氏  
日本大学法学部 稲葉陽二研究室  
緒方淳子

